

# 一夜限りの快樂 海辺の小屋で大乱交

僕は平屋の小屋の中で女性たちと一夜限りの天国を味わい尽くした。

だけどころして今、一人で歩道橋を渡り見上げる月の下で、あんまりその一時のことを覚えていないことを自覚する。

夢のようだった。

俺は缶コーヒーを片手に今からスーパーに買い物へ行くだけ。その後は友達と会って一緒に飲みに行く。

俺はさわやかに生きたかったのが本心なのかもしれない。

かもと推定的に言うのは、やはり人間は弱い生き物だから今後自分の欲に目がくらむことも断定してないとは言い切

れないからだ。だけど、もう普通に生きていきたいのだ。

あの一夜は一生分の快樂だった。

一夜にして一生分のセックスの快樂を味わったのだ。

皆で。

あのひとときは、快樂の地獄のようだったのかもしれないが、俺からすれば人間の弱さだと思う。

皆、流れ流れてあの場所に行き着いた。

平屋の小屋の前には少し不気味な石像が石筒の上にまるで学校の校門のように置かれていた。

その小屋は海岸近くにあった。

皆、人生の辛酸苦汁をなめた者同士であった。

海までは行かなかった。

きっかけはとある夜、星屑にまぎれた大きな満月が膝を抱える僕らに優しく微笑みかけたことだ。

小さな光を信じ、人生を変えたいと願っていた者たちだけに。

ある一定の人間にしか見えないというやつである。

海岸へ向かいなさい。その少し手前に昔海から這い上がってきた怪物の群れが木々や石を組み立て作ったと呼ばれる小さな小屋がある。神を祭る社（やしろ）となっていた時期もあった場所だ。

そこには摩訶不思議な魔力があるため、苦しみを通過することができるであろう。

俺と体を交え合ったりナちゃんやタカキ、サナエちゃんなども現在は皆同じ空の下で生活をしている。

ハガキでその後を報告し合っている。

爽やかな風に吹かれ、新しい人生を歩んでいるようだ。

あの一夜は言葉では表せないほどに凄かった。月の優しい語り  
りに吸い寄せられるように集まった俺たちの想いは一致し  
ていた。

集まったあと特別話し合うようなことすらしなかった。

言葉ではない語り合いというものがある。

(体験版は以上になります。ご読了ありがとうございました)